

## 二 原始・古代のすがた



東中江遺跡の発掘調査〔昭和53年〕

## (一) 平村の縄文遺跡

### 1 村内の遺跡

#### 田 向 遺 跡

平村内の縄文遺跡で最も著名なものは、田向遺跡であろう。

それは明治二十六年四月、田向の堂本氏宅の増築工事中、彫刻を施した鎌形の石が地表から一坪ほど下で発見されたことに始まる。しかし、奇形の石で不安だと、ほどなく土中にもどされてしまった。

大正七年の春、この石は再び掘り出されることになる。利賀村西勝寺の二十七世住職で、山深い五箇山の地にありながら早くも明治三十九年に東京人類学会の会員になられた、富山考古学界の草分の一人である米沢安立師が、堂本氏を説得されたのだった。

この珍しい石器発見のことは米沢から東京帝国大学の紫田常恵にもたらされ、紫田はさっそく人類学雑誌第三十三巻八号に「越中国砺波郡平村田向発見の石器」と題して発表し、石器の写真が巻頭を飾った。

以後、この石器は、バナナ形石器とか装飾石器とか呼



装飾石鋸（バナナ形石器）の出土地点  
平村 田向集落



ばれ、その出土地として田向遺跡の名も全国に知れわたったのである。

## 東中江遺跡

東中江遺跡も、よく知られている遺跡の一つである。

明治期から、東中江小学校の周辺で土器や石器の出ることは知られていたようだが、小学校横でサイフォン式用水による水田化工事が行なわれた昭和二十九年、東中江小学校に勤務していた高田善太郎が平村教育委員会と協議し小・中学生と共に調査行ない、これがこの遺跡を県下に知らしめることになった。この調査では、縄文時代中期から後期にかけての遺跡だということを掴むとともに、工事中にたくさん掘り出された礫が円形に配列されたり立てられたりしていたのではないかという推測がされたので、関心を集めたのだった。

昭和五十三・四年、老朽化した校舎を改築するのに先だって、平村教育委員会が県の埋蔵文化財センターの指導を得て発掘調査を行ない、住居址や炉址などを検出した。報告書『東中江遺跡』が、村から刊行されている。

## 村内の遺跡

この二遺跡のほかにも、村内のあちこちに縄文時代の遺跡が、発見されている〔表1〕。

庄川が深い谷を刻む山間の地にも、小さな平坦地がそこそこにある、そこに現在の集落も営まれているのだが、この集落と重なり合うように遺跡がある。遺跡の密度は、県内の平野部より高い。これは、居住に適した平坦地が限定されているので密集することにもなる



東中江の出土品調査 中央は嶋尾正一氏〔昭和29年〕

⑮	峠	打製石斧 土器	に調査概要がある。 縄文中期か。場所は尻高谷から遠洞までの中間。 集落の山手側から出土。
⑰	上 梨	石冠 石棒 砥石 磨製石斧 打製石斧 土器	
⑳	田 向	装飾石鋸(バナナ形石器) 石棒 磨製石斧 打製石斧 土器	





平村の縄文遺跡

表 1 平村の縄文遺跡

遺 跡 名		主 な 出 土 遺 物	状 況 な ど
①	祖 山	石棒 石槍	出土地域は限定されない。
②	杉 尾	石棒 石刀 石皿 砥石 磨製 石斧 打製石斧 土器	字南原の水田開拓地帯から出土。土器 細片を伴なう。
③	渡 原	打製石斧	集落内から出土。
④	大 崩 島	石冠 叩石 凹石	ダム水没地から上方へかけて出土。
⑤	寿 川	打製石斧	地域は限定されない。
⑥	高 草 嶺	打製石斧	同 上
⑦	東 中 江	硬玉製大珠 石刀 御物石器 擦石 石棒 砥石 石冠 石錘 石皿 叩石 凹石 磨製石斧 打製石斧 石匙 石鏃 土偶 耳飾 土器 円板状土製品	縄文中期～晩期。 『小谷遺跡・遺物包含地の報告書』昭和30年東中江小学校刊がある。 昭和53・54年調査の『東中江遺跡』発掘調査報告書が昭和57年に平村教育委員会から刊行。
⑧	入 谷 島	石棒 石刀	出土地は小谷川東又の河床にできた平坦地。
⑨	下 出	環石 石棒 磨製石斧 打製石斧	広い範囲にわたって出土。
⑩	籠 渡	磨製石斧 打製石斧	神社より南西方向の畑地から出土。
⑪	下 梨	石鏃 石槍 石錘 硬玉製大珠	縄文中期・後期。
	こもむら	石皿 石棒 叩石 凹石 砥石 石匙 磨製石斧 打製石斧 土 器	昭和初年に大珠・飾石の出土で知られていた。昭和40年『こもむら遺跡調査報告書』を平村教育委員会から刊行。
⑫	下梨馬廐場	石匙 磨製石斧 打製石斧 土器	縄文中期。平村農協の近辺から土器片多く出土。
⑬	下梨上林	石剣 叩石 磨製石斧 打製石斧	上の平より一段上の段丘になる。
⑭	下梨上の平	磨製石斧 打製石斧 土器	せまい段丘平地であるが出土遺物が多量。
⑮	下梨中の平	石棒 石刀 磨製石斧 打製石 斧 土器	平中学校付近の傾斜地から出土。
⑯	小 来 栖	石棒 磨製石斧 打製石斧 土器	一定の地域に限定されず各所から散出土。
⑰	来 栖	石棒 磨製石斧 打製石斧 土 器	縄文中期～晩期。集落から上のほう広い範囲から出土。『東中江遺跡』報告書

のだが、米沢安立や高桑敬親・高田善太郎などの、地域に密着した調査が行なわれてきた結果でもある。

### 居住の始まり

この地に縄文時代の人々が住み始めたのは、いつ頃なのだろうか。

この間に答えてくれるものは、土器である。素焼の焼物Ⅱ縄文土器は、主に当時の人々の調理用の煮沸具であった。そのために損耗度合が高かったのであろう、縄文時代の遺物の中では出土量が最も多いし、粘土を材料にしているので形や施される文様の変化の度合が速く、時間的変化をよく示してくれるので、考古学の時計の役割を果しているからである。

村内で発見されている縄文土器の最も古いものは、来栖遺跡と下梨のこもむら遺跡で出土している。内湾した口縁部を持つ器形の土器で、円筒状の胴部に木目状捺糸文（捧に細い縄を巻きつけて転がした文様）を施したものが「図1」で、中期初頭（約四五〇〇年前）の新保式と名づけられている様式に属するものである。

### 中期の遺跡

中前期葉の土器（新崎様式）は、来栖と東中江の両遺跡に少量だが出土している。

中期中葉の天神山・上山田様式土器は、細い竹様のものを半截し、まだ柔かい粘土面にこの内面を押し当てて引き、彫りの深い文様を付けたものであるが、この手の土器が東中江遺跡の発掘でまとまって出土している「図2」。1から3は煮沸用の土器だが、飾った深鉢1と飾らぬ深鉢2、台脚がつく土鍋様のもの3という具合に、用途に応じて作り違えている。

下梨のこもむらや馬駆場遺跡でも天神山・上山田様式土器が発見されているし、峠・花房遺跡もこの時期に属するようである。

中後葉の串田新様式土器は、粘土隆帯と篋状具で引いた沈線を主として文様を構成し、アナダラ属の貝殻の腹縁を押しつけて飾ることを特徴とする。東中江遺跡で数多く出土し、来栖遺跡でも一点だが発見されている。



後・晩期の遺跡

中期から後期の前田・気屋様式はこもむら・東中江遺跡に出土している。両遺跡とも資料は豊富である〔図3〕。

後期中葉から後葉のものは、同じく、こもむらと東中江遺跡から出土している。上の平・田向にも、この期に入りそうな資料があるが、細片で確定はできない。

晩期中葉から後葉のものは、東中江遺跡の発掘資料中にあるが、前葉のものは、その東中江にも、こもむら遺跡

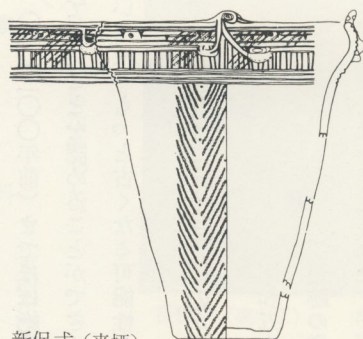


図1 新保式（米栖）

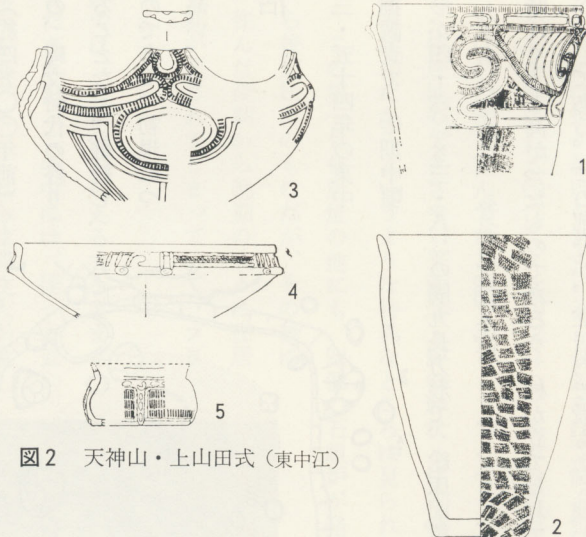


図2 天神山・上山田式（東中江）

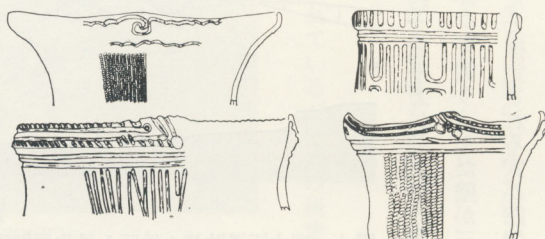


図3 気屋式（東中江）

にも発見されていない。

上の平遺跡に類するものがありそうだが、細片である。来栖遺跡には、中葉に属する可能性のものがあるという。

このように、出土している土器の検討からは、村内における縄文人の居住が中期初頭（約四五〇〇年前）に始まり、以後、増減はあるものの、縄文時代の終り（約二三〇〇年前）までほぼ絶えることなく、継続していたことを認めることができるのである。初現については、もっと古くなる可能性が高い。

## 2 縄文時代の生活

### 住居

昭和五十三・五十四年の東中江遺跡の発掘調査で、中期中頃

の竪穴住居址が発見された。平面形が四・六メートル×三・八メートルの隅丸長方形で、総床面積は約十五平方メートル。北陸の縄文時代の住居址の平均床面積が約十九平方メートルだから、普通規模の住居より少し小さい。赤土を掘り込んだ壁が三センチメートル位の高さで残っているが、往時はもっと高かったものであろう。柱が立てられていたと推定される穴が四個あって、これより内側の床面には砂が敷いてある。この部分が、住居内で最もよく使われた平面空間なのであろう。

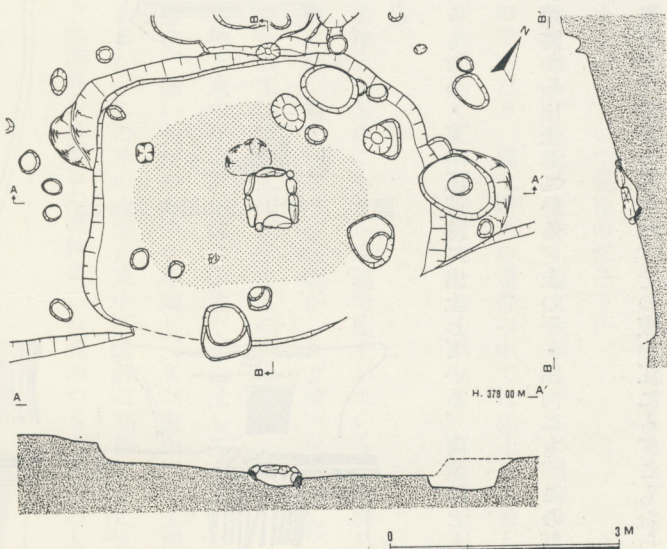


図4 東中江遺跡第1地区1号住居跡実測図  
(発掘調査報告書より転載)



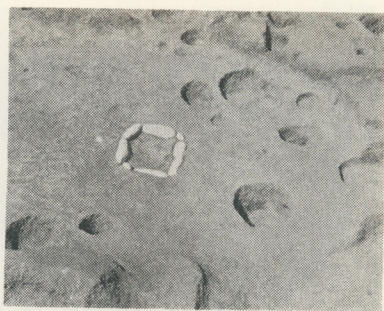
ンは分からなかった。

## 食

## 料

東中江遺跡では、五百個を超える大きささまざまな穴が掘りだされた。この中には、径一・五メートル前後の楕円形や隅丸方形をしたものもあって、これらは縄文人が食料を貯蔵した所だろうと推測できる。

貝塚などから発掘されたものなどからみて、縄文時代人は狩猟や採集などによる自然に依存した生活をしていた、というのが一般的な考えであるが、縄文人が日々に食したものは、また、このような穴にはどんなものが貯蔵されたのだろうか。



石組炉（東中江）

中央には炉が設けられている。長辺には二個、短辺には一個の礫を配し、隅に小石を埋めた八〇センチ×七〇センチの、長方形石組炉である。炉の内は、床より一〇センチ深く窪んでいる〔図4〕。

住居址の大きさや、平面形・炉の形状・柱穴の規模などでは、山間地とか豪雪地帯だからというような特異なところは見られない。

この第一号住居址の他にも、四個の石組炉が発掘されている。中期の後葉から後期始めのものだが、その後に住んだ後期から晩期の人々に住居址が壊されてしまっていて、プラ



2・3号住居跡周辺の遺構（東中江）

# 石皿と打製石斧

かつて澄田正一は、九頭龍川上流地域と庄川上・中流地域出土の縄文時代の石皿を集成

し、それから得られた結論として、この地域で昭和二十五年頃まで盛んに行なわれていた焼

畑農耕が、縄文時代にまでさかのぼるのではないかと想定した（『農耕地に出土する石の皿の研究』昭和三十四年）。石皿とは、楕円形をした安山岩

や流紋岩の河原礫の片面を窪ませその一端に流し口を付けたものである。縄文時代中期から後期に既にヒエやア

ワなどが栽培されていて、このような石皿で製粉されていたというのである。また、打製の石斧を、焼畑耕地で除

草用の手鋤として使用されたものだろうとも推測した〔図5〕。

米沢康も、大きな打製石斧が五箇山で発見されるがこれらは土掻きに用いられたもので縄文時代に原始陸耕がこ



石 皿（東中江）



打製石斧（東中江）

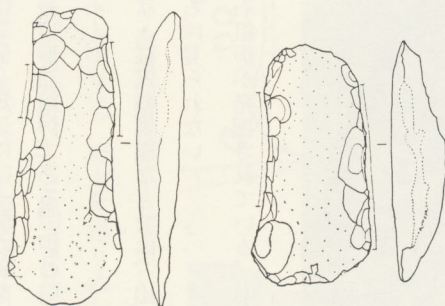


図5 打製石斧（東中江）



の地で行なわれていた、という考えを述べたことがある〔越中五箇山における縄文式（遺跡・遺物）昭和三十四年〕。

これらの発表は、縄文社会の見直しをせまる大きな問題を投げかけたものであった。

石皿は、澄田氏の指摘のように、濃・飛・越の山中の遺跡では目立つ石器である。東中江遺跡でも以前から好資料が知られていたが、今回の発掘でも砂岩製のものが四点出土している。上平村の高草嶺や下島でも発見されているし、西赤尾には、採集された後に南無阿弥陀仏と名号を彫りこんだものもある。打製石斧も、上の平遺跡で数十本が採集されているなど、五箇山では最も多い石器である。

しかし、石皿や打製石斧は県内の平野部でも出土し、濃・飛・越山中だけの独自の動きではない。石皿は、堅果類などを擦りつぶす台石、打製石斧はひろく土掘り具と理解することもできるので、五箇山の地域で縄文時代に既に焼畑耕作などが行われていたということを、積極的に認めることのできる資料にはなり得ないと、私は考えている。だが近年発掘された大門町小泉遺跡の報告書では、縄文前期に栗の栽培が行われていた可能性が高いと報告されたり、福井県鳥浜遺跡では、栽培種と考えられるヒョウタンやリョクトウが発掘されたりして、縄文時代の生業を見直さねばなくなっているのも事実である。

## 山の幸

狩猟・採集の経済であっても、堅穴住居を構えるような定住的生活は十分に行えたであろうと考えられる。そうして狩猟採集に依拠した縄文人の食料は、酒詰仲男が日本全国の貝塚出土資料の研究から二五八品目を食されたものとしてあげているように、多種多様のものにわたっていたのである〔図6〕。

五箇山の遺跡からは、縄文人が食したものが遺物として出土してはいないが、つい先頃まで、あるいは今も山の幸として採集されているものが、縄文時代から食されていた可能性は高いであろう。アサツキ・ゼンマイ・ワラビ

・コゴミ・ウドや、ジョーバ・ミズナ・キバウシなどの野草類や、カタクリやクズ・ユリのような根茎も掘り出され、焼いて食されたり粉にして保存されたりもしたのであろう。打製石斧は、この根茎類を掘り出す時にも用いられ、石皿もこれらを粉にする道具と考えられる。地キノコ類や、山ブドウ・アケビやグミなども季節のものとして、味覚に変化を与えてくれたことであらう。

## トチの実

しかし、なんといっても主食料として大きな比重を占めたものは、秋にとれるトチやドングリ類、クリ・クルミ・カヤなどの、堅果類であつたろう。

特に、台風の前づく九月中旬に熟して落ちるトチの実は、重要なものであつた。天日で良く乾かしたトチの実は、十年位保存がきくといい、江戸期には備荒食にもなっていた。近年までの五箇山では、年に四、五俵から二十俵余を一戸で消費したというほど、利用されてもいた。ただ、トチの実はアクが強く、このままでは食されない。クリやナラなどの生木を囲炉裏でもした灰をトチと同量用意してサワすのだが、そのうえに水さらしも必要で、手間のかかるものである。だが、東北地方の縄文中期の貯蔵穴か



とちの実 未熟な状態

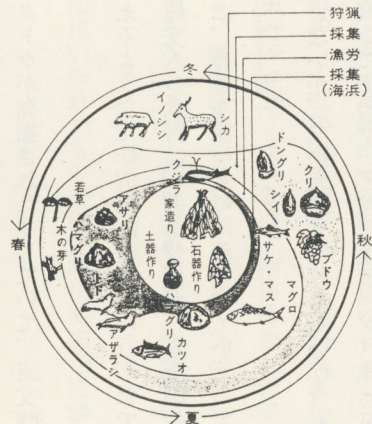


図6 縄文人の生活カレンダー  
(小林達雄作図)



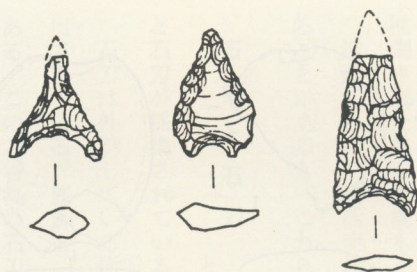


図7 石鏃一矢じり（東中江）

らトチの実が層になって発見されているので、この頃からもうアク抜き技術を持っていたことは、間違いない。

必要に応じて、石皿の上で粉にされたトチは粥状にしたり、ダンゴ状にして汁の中に入れられたり、時にはクッキーのように炉で焼かれたりしたのであろう。材料が何だか不明ながら、クッキー状の炭化物が、岐阜県の峰一合遺跡や長野県曾利遺跡、新潟県の沖ノ原遺跡などで発見されている。

### 獣や川魚

植物の他に、シカやイノシシを主にカモシカやウサギ・ムシナなどの獣や鳥なども、時折は食膳を賑わしたことであろう。野生のイノシシなど、今は姿を県内で見ることはないが、朝日貝塚や蜆が森貝

塚・小竹貝塚では、シカの骨とともに出土している。上流の岐阜県荘川村では、初雪の降る頃に群をなして移動するイノシシを部落総出で狩ったというし、五箇山でも、イノシシ一頭につき米一斗の褒美を与えるというおふれが安永五年に出されている位だから、かつては結構いたのである。縄文時代も盛んに狩られたであろう。

集落も山々も雪に埋もれてしまう冬場こそが、狩猟に適した時であった。ウサギのネトビ跡を探しあててのウサギ猟やヤマドリばいなどは、単調な冬の遊びにもなったろうか。クマは機猟わなうしでとることもあったろうが、やはり今と同じ冬も終りの三月の暖かくなった頃、洞窟や樹洞にこもっているのを突き捕えるのが主であったろう。朝日貝塚にはクマの骨が出土している。村内からも、このような生き物の捕獲用具の石鏃や石錘を出土する〔図7・8〕。

庄川を遡るマスやサケも、見逃がせない食料であった。大正期の庄川下流域では、年間にサケが六千貫から一万貫、マスが八千貫から一万五千貫捕獲された記録がある。また、ダムのできる昭和初年以前、上流の岐阜県白川村

では、マスが産卵のため支流に満ちて川底の石が見えなくなったほどいたといい、各家で桶に塩漬にして年中の消費に事欠かなかったという〔『白川村史』）。縄文時代にも、サケやマスが貴重な保存食料となっていたであらう。アユや溪流魚のイワナもまた貴重な食料となったであらう〔図9〕。

### 祈りと呪術

自然の四季の移りの中に身を置き生きた縄文人たちは、時折々の祈りを、また、人生の節目には儀式を行

ったようである。

昭和二十九年、東中江遺跡で大きな河原礫を立ててあったのではないかと

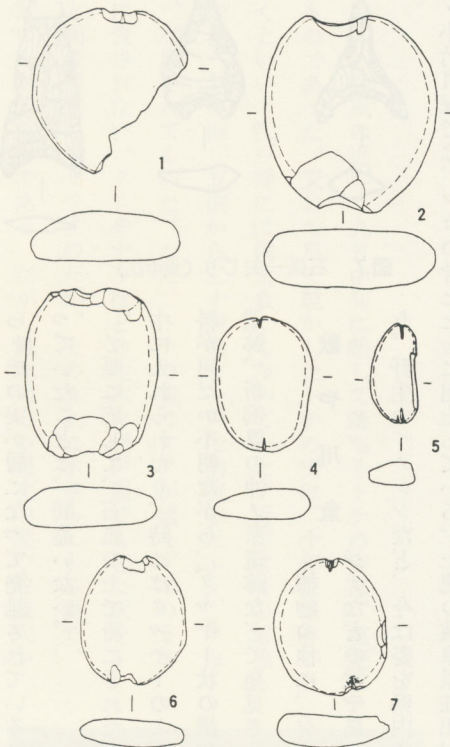


図8 石錘—石おもり（東中江）

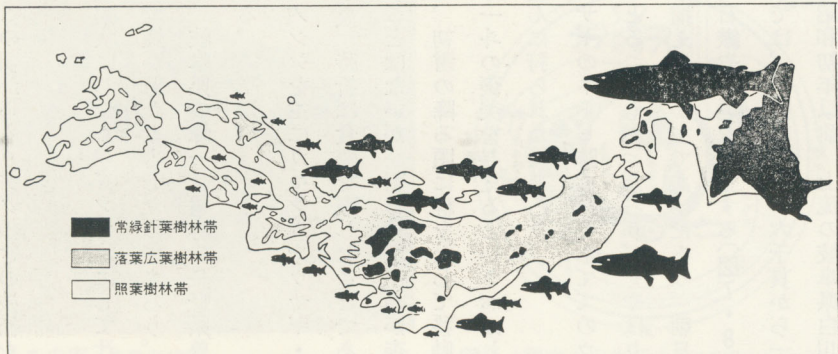


図9 サケ・マスの分布と樹林帯



推測された集石遺構も、儀礼にかかわるものであったのだろう。

遺跡からは、生活実用具と考えられないようなものが時折発見されることがあるが、これらは呪術具と見なされる。

### 石 棒 と 石 刀

庄川の支流小谷川を少しさかのぼった入谷島と呼ばれる所から、半分ほど欠損している石棒と石刀が採集されている。

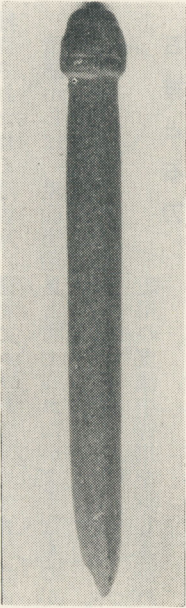
石刀は外湾している所が平で背になり、反対の直線個所に刃が作り出されている。握部も、断面形を楕円に整えている。凝灰岩質の石である。この入谷島の石刀とよく似たものが、上梨からも出土している。長さ二十三<sup>センチ</sup><sub>メートル</sub>、完形である。やはり直線部分が刃になっているが実用具として使用したと認められるような痕跡はない。

入谷島の石棒は、断面が楕円形に作られている。杉尾には長さ二十四<sup>センチ</sup><sub>メートル</sub>の完形品が発見されているが、こちらは断面が丸く、先端には刃が作られている。この石棒は、もとはもっと長かったのだが折れたので研ぎ出して今の刃が作られたようである。田向や東中江遺跡にも、石棒は出土している。

このような石刀や石棒は、後期の半ば以降の時代に属するものである。下出からは、環状石斧と呼ばれる珍しい石器が発見されている。中央に孔を穿ち周囲に刃をつけた、円盤状の石器である。石斧と名づけられてはいるが、斧として機能したものかどうか、片面に放射状の加飾をしていることも



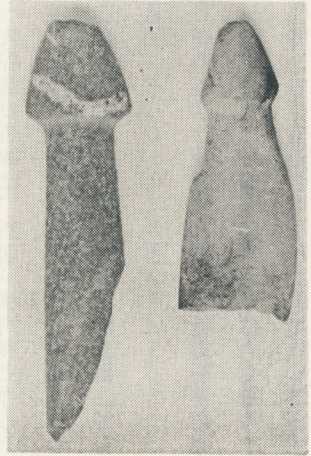
東中江遺跡の発掘列石を復元 [昭和29年6月]



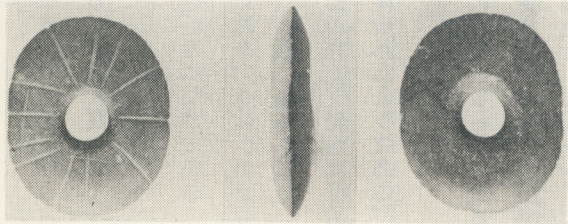
石棒 (杉尾)



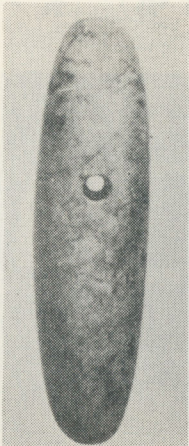
石刀 (上梨)



石棒と石刀 (入谷島)



環石 (下出)



硬玉製大珠  
(下梨こもむら)



硬玉製大珠  
(東中江)

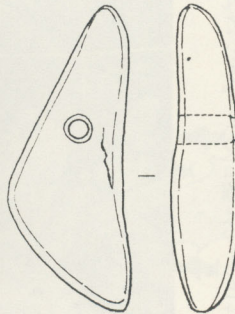


図11 硬玉製大珠  
(東中江)

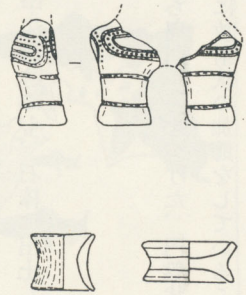


図10 土偶と耳飾り  
(東中江)



あつて疑わしい。時期も、晩期かあるいは弥生時代まで下るものか、不明の石器である。

## 土

### 偶

土偶が、東中江遺跡から一点出土している。腰が張り出たように表現されている。脚の部分だけである。後期のものであろう〔図10〕。

東中江遺跡だけでなく、土偶は欠けて出てくることが多い。そのような土偶を観察すると、壊れ易いように作つたと思われないものもある。

そこで、土偶は縄文人の疾病などの肩替わりの為に、破壊されたものだったという見方もされている。

## 土製耳飾とヒスイ玉

土製の耳飾が、東中江遺跡で二点出土している。滑車のような形をしていて、一つは直径二・九<sup>センチ</sup><sub>メートル</sub>、もう一つは四・二<sup>センチ</sup><sub>メートル</sub>と大きい。この土製品は、耳たぶにはめ込まれて飾りと

されたものだろうが、単なる飾りというよりは、ある年齢になるとつけなければならぬというような、社会規制があつたと推測されている〔図11〕。

装飾品には、石製の玉もある。東中江遺跡では、滑石で作られた玉とともに、ヒスイに孔を穿つたものも発見されている。ヒスイの玉は、こもむら遺跡でも二点出土している。そのうちの一点は、長さが十四<sup>センチ</sup><sub>メートル</sub>もある大型のものである。

これらヒスイの玉は、新潟県の姫川から富山県朝日町にいたるあたりからもたらされたものであろう。時代は、中期と考えている。

### 3 他地域との交流

#### 生活圏

縄文人たちが、その日その日にねぐらを替えるような生活をしていたのではなく、拠点を決めて定住していたことは、東中江遺跡から発掘された竪穴住居址の存在からも明らかであろう。

だが、二ツ山を越す積雪のある山間の地で人々は冬も過したのだろうか、季節に合わせた居住地の移動が行なわれたのではないか、という考えも出てこよう。

しかし、東中江遺跡を見ると、住居址のほかに貯蔵用の穴があり、祭祀を執り行なったと思われる礫群遺構があり、墓<sup>ぼ</sup>塚<sup>こう</sup>の存在も推測され集落として全ての機能を持つので、そこからは季節的な移動を感じとることは難しい。自然の恵を巧みに取り入れて生活していた縄文人は、五箇山の厳冬期をも自然の巡りとして受け入れ、この地を自分たちの世界として留まっていたものと推測する。

縄文社会には、各集落がもつ生活圏があつて、みだりに他地域への移動はできなかったとも考えられる。平・上平両村内の大きな縄文遺跡といえ、東中江遺跡、こもむらなどの下梨遺跡群、皆葎遺跡群、西赤尾の遺跡群を上げることができるが、これらの集落が核になりお互が重なり合わない程度が、それぞれの生活圏であつたのではないだろうか。

#### 他地域との交流

それぞれの生活圏があつたといひながら、縄文社会が全く孤立的で閉鎖的なものであつたというのではない。

先にみたヒスイは、五箇山では産しない石だから、他所からもたらされたことを、端的に示している。土器も、



交流が盛んであったことを物語っている。平村内で出土する土器の多くは、県内平野部で作られているものと文様も器形も同じもので、情報がよく伝わっていることをあらわしている。

ところで、平村から平野部を下る庄川は、祖山から下流では山がせまり急峻で、遺跡も発見されていない。平野部との交流は、おそらく朴峠や杉尾峠・小瀬峠などの山の尾根道ごえで行なわれたのではないだろうか。あるいは、山ノ神峠を越し利賀村内の遺跡を通しての流れもあったであろう。今後、遺物の観察からこのような細かな動きも検討してみたい。

### 土器から見た交流

庄川をさかのぼっての飛驒との行き来は、どうであつたろうか。おそらく、先土器時代にも縄文時代のごく早い時期にも、あつたであろう。早期の押型文土器の中で胎土に黒鉛を入れているものが、長野・岐阜・富山の各県に広がっているが、本村に近い岐阜県白川村の巾通り遺跡からもこの様式が発見されている。庄川筋をこの土器を持った人々が通つたように思えるのである。

しかし、いま五箇山で確認できる最古の縄文土器は、上平村皆葎遺跡で発掘された前期の北白川下層式土器である。この様式の土器は、関西から東海地方に主に広がっているものだが、飛驒にも散見できるので、この方面から来たものであろう。

### 中 期

中期の始めは、五箇山で遺跡が明確に認められるようになる時である。この期の新保・新崎様式土器は勢が強く、県内だけにとどまらず、飛驒にも分布する。庄川筋では、白川村島中通遺跡に出土している。東中江と来栖遺跡には、逆にこの期の関西系の船元式の小片が一点出土している〔図12〕。

中期の中頃も北陸の勢は強く、神通川筋では分水嶺を越えて岐阜県荻原町の沖田遺跡などで、天神山様式土器が

発見されている。庄川の上流域でも、白川村の巾通り遺跡から同様式の土器が出土しているし、小白川分校に集められていた資料中にも同じ土器があった。

この中期中頃の岐阜県内には、北陸よりももっと強力に長野方面から勝坂様式土器が流れ込んでいて、飛騨北部にも及んでいる。だが、この勝坂様式土器は、北陸の中には入り込めなかった。五箇山にも入ってはいない。

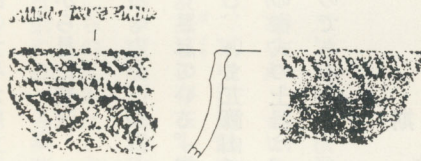


図12 船元式土器（来栖）



図13 葉脈状文の流れ



中期の後半に、土器面に矢がすり状の沈線文様を描くことが北陸でも流行するが、この文様の始まりは長野から山梨県あたりを中心に分布する曽利様式土器であった。この曽利様式は勝坂様式土器と同様に勢が強く、東海地方にも飛驒にも入り、それぞれの地域で受け入れられてその地の様式と同化して行った。だが、北陸には貝殻文で器面を飾る独特の串田新様式土器があって、曽利系の進出を拒んだ。五箇山でも、曽利式そのものは出土していない。神通川や庄川ぞいを下れぬまま、曽利系土器の流れは西に向い、白鳥村あたりから山越して九頭龍川流域へ、さらには手取川を下り石川県西部に広がって行った。石川県西部は串田新様式圏の西端部だから、曽利系土器は再び串田新様式土器圏と接触を持つことになったわけであるが、ここではうまく融合して、矢がすり状沈線文は串田新様式土器の中に取り入れられるのである。北陸の研究者はこの新たに取入れられた文様が、木の葉などの葉脈に似ているので、葉脈状文と呼んでいる。能登にはこの葉脈状文を用いた土器は少ないが、串田新様式の一型式として北陸に広がって行く。東中江遺跡から出土した葉脈状文で飾った土器も、曽利式の影響を

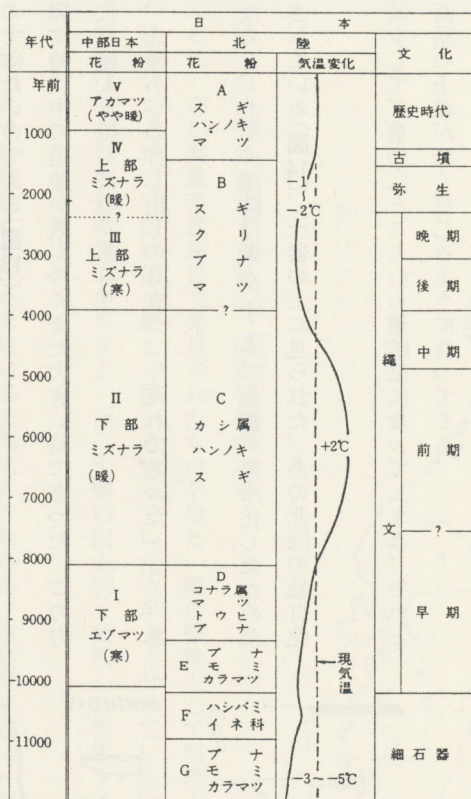


図14 日本中部山地と北陸における過去1.2万年間の気候と植生変化  
(堀正一・藤則雄作図より)

直接飛驒から受けて作られたものではないのである〔図13〕。

この中期の後葉は、五箇山の縄文時代中で遺跡が最も多くまた大きい時であった。この力が独自性を強く表明し、曽利様式の侵入を拒んだのであろう。

中期における飛・越の交流は、北陸からの押し出しの目立つ、片流れであったようである。

## 後 期

後期になると、北陸の遺跡は減少する。気候が寒冷化したためだと、推定されている〔図14〕。土器の上に見られた、あの北陸の独自性も失われてしまう。

五箇山でも、この期の遺跡は減少して、東中江とこもむら遺跡位になってしまう。それと同時に、資料の中に東海系や関西系の土器が多く混じるようになってくる。

例えば、東中江遺跡で出土している口縁をくの字形に立ち上げた特徴のある土器の広がりを追ってみると、岐阜県から愛知・三重・静岡の各県に及ぶもので、東海系の土器といわれているものである。北陸の平野部にも達している〔図15〕。

後期は、中期とは一転して飛驒側からの流れが強かったとしてよいだろう。

## 晩 期

晩期になると、八日市新保・御経塚・中屋式など北陸独自の土器様式が生まれ、中期と同じように北陸圏を作り上げる。口唇部に文様を付した独特の浅鉢などは、岐阜県南部から愛

知県にまで届いている。

白川村の巾通り遺跡の晩期の土器は、中屋式で占められていて、白川あたりも北陸圏の中に組込まれていたこと

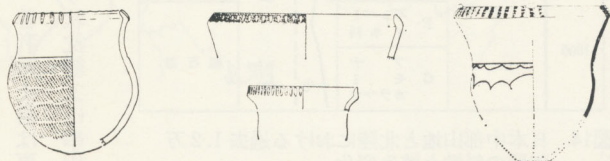


図15 東海系の土器（婦中町二本榎）（平村東中江）（静岡岡親塚）



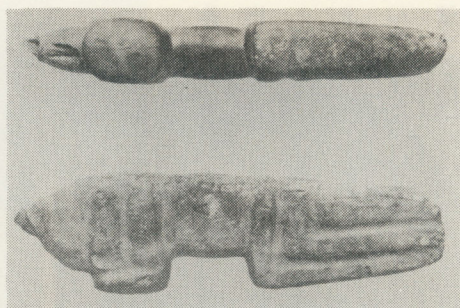
を示している。

# 御物石器

北陸と飛騨の強い関係を示す資料に、御物石器がある。

御物石器とは、石川県鳳至郡比良で発見されたものが珍しい鯉の置物として明治十年に天皇に献上されたことから名前がつけられた石器で、形は何を模し、何を意味していたのかよく分っていないのである。底面が荒れていることから、擦る行為を行う祭祀具であろうと、百二十個の出土例を集成した橋本正は推測している（御物石器論）。

橋本の作成した分布図によれば、岡山県や鳥取県にもごく少数の出土例はあるものの、岐阜県と富山・石川県に



御物石器（岡岡市中川）

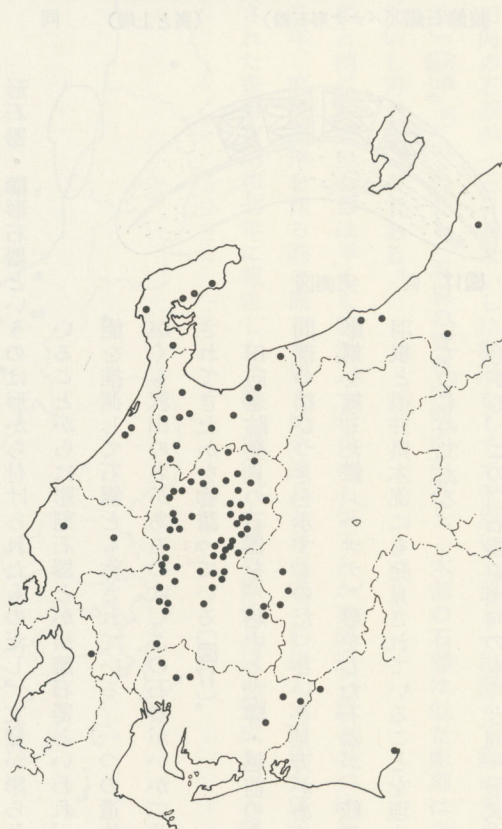
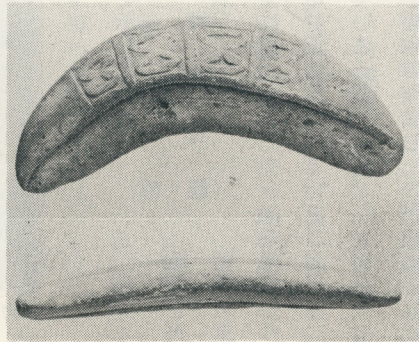


図16 御物石器分布図（橋本正1976から作図）



装飾石鋸（バナナ形石器）

（裏と上端）



同

（表と刃部）

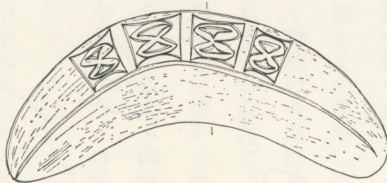


図17 同 実測図

### 石鋸・バナナ形石器

集中していることがよく分かる〔図16〕。村内でも、東中江遺跡から「能飛型棒状頭式」の小片が一点発掘されているし、他にも一・二点の発見例がある。

この石器の所属時期は後期の末葉から晩期の後葉で、もっとも盛んに作られるのは晩期の前半から中頃であろう。

大正七年に報告された田向遺跡発見の石器は、いろいろな名前を持っている。バナナ形石器・三日月形石器・楡形石器というのは形から付けられたものだし、文様が彫られていことから彫刻石器とか装飾石器といわれ、機能を推測して石鋸とも称されている。一つの遺物にかくも沢山の名があるのは、この石器がいかに注目されてきたかを物語っている〔図17〕。

田向遺跡発見の石器を、越中と飛騨・越前の各山間部の結びつきを示すものだ、という見方がある。彫刻を施した鎌（バナナ）形をした石器が、岐阜県羽根と福井県木部にも発見されていることを理由としてのものである。

しかし、この二石器を田向のものと同一形式の石





石鋸

(上市町丸山A)

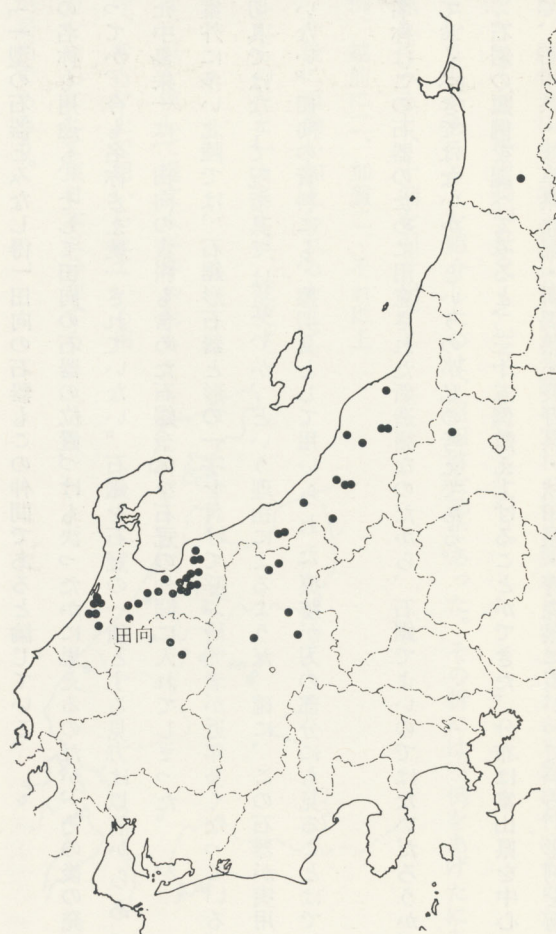


図18 石鋸の分布

器と見ることに、無理がある。田向の石器が「三日月ないしは楕形をして部厚い上部と一段薄く下縁に刃のついている下部の二段にわかれている」(八幡昭和七年)のに対し、羽根の資料は断面が丸く、木部の石器は似た彫刻はあるものの、作りは二段に別れてもないし刃がないのである。

彫刻の有無を別にして田向の石器と同じ形式の石器は早くも明治二十年代に石包丁とか葉研形石器と名づけられ出土が報じられていたが、同三十二年、磨製石斧を作る際の原石を切り出す道具と考えて、石鋸と大野延太郎が命名している。長野県宮遺跡で発見された資料を昭和七年に報告した八幡一郎は、大野の擦切具説に賛成し、石鋸は

他の石器と区別されて「一型の石器とみなし得」田向の石器もこの仲間であると論じている。

八幡の論攻で、石器の名称も用途も、そして田向の石器の位置づけも決ったかに思えるのだが、その後の発見例が少なかったこともあってか、今も名称さえ統一されていない。石鋸を石冠の一種とする見方は以前からあったが、近年石冠を集成した中島栄一は、田向の資料も含めた石鋸全体を石冠の仲間に入れてしまった。

また、石鋸の発見が案外に多い北陸では、石鋸形石器と形の一字を付けて呼ぶ研究者が近年多くなっている。それは石鋸が実用的な擦切具ではなくて呪術具ではないか、という理由によるようだ。確かに、この石器が実用具であるとの断定はされていない。田向の資料にも、擦切具として用いられた痕跡が刃の部分にも見ることはできない。

しかし、石鋸という名称はこの石器のために用意された新造語なのだから、石鋸でよいのではないだろうか。石冠とは、形式を区別しておくべきではないか、というのが私の考えである。

### 石鋸の分布と時期

石鋸の類例を調べてみると、三十五例数え上げることができた。分布は富山県を中心にして、石川県・岐阜県北部・新潟県・長野県・秋田県・青森県に広がっている。彫刻を施した

ものも数例ある。

石鋸の所屬期については、後期末から晩期前半という見方がある。しかし、近年の発掘例には晩期末を想定させるものがある。富山市豊田遺跡では、晩期末の土器・弥生式土器と共に溝の中から出土しているし、上市町の弓ノ庄城跡の出土例にも晩期末の土器とのかかわりが読みとれるのである。

石鋸は、先に見た御物石器にやや遅れた晩期後半に盛期を向え、分布も御物石器のように飛騨や東海地方には向わず、北陸を中心にして東北地方の日本海側で用いられたものと纏めることができるだろう〔図18〕。



彫刻の複雑さや器の大きさ、湾曲の強さなどで、田向の資料は特異な位置を占めるものであるが、この石鋸の一員なのである。

# おいねずみ

最後に、飛驒の山中に主に分布していて、“おいねずみ”という名を持つ石器を紹介しておこう。

おいねずみ、なんとも変わった名前だが、本村の上梨から出土している、半円形の礫の片方に小さな突起をつけた石器（写真）が、その一例である。

“おいねずみ”は老鼠、国学者田中大秀（高山住）が飛驒は宮村の位山麓から発見された石器に付けたのだという（在野冊子）。頭を下げちじこまった鼠が想われる、ということなのだろう。

この“おいねずみ”という名があることを紹介したのは、沼田啓太郎であった。その折には三例をあげたにとどまるが、いま類例を渉猟してみると、十例を引き出すことができた。飛驒に五例、越前に二、加賀二、それに上梨の一例である（図19）。今後に類例が加えられるとしても、飛驒山中を中心にしたものだということは、変更する必要があるだろう。

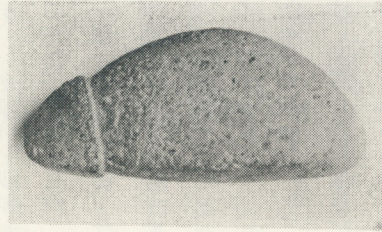
この“おいねずみ”は、鼠を模して縄文人が作ったものではないであろう。今、考古学上で用いられている用語では、飛驒と北陸地方を中心にして東日本に分布する石器、石冠をあてるのが妥当であろう。



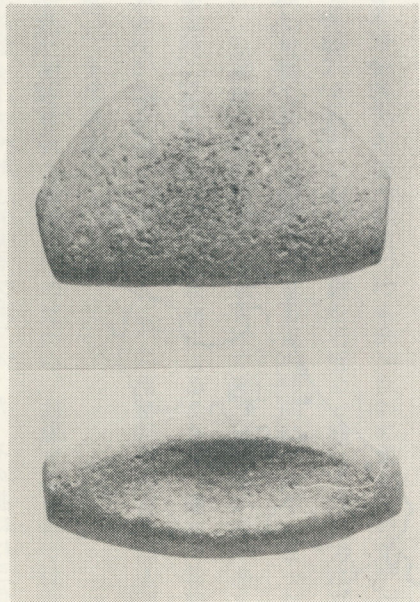
図19 おいねずみ型石冠の分布

石冠にもいろいろな型がありその用法も解明されていないが、底面を持ち背が弧を描く基本形は、例えば東中江遺跡採集の石冠（写真）と同じだし、底面に窪みを持つことも（上梨の資料にはないが）、類似点としてあげる事ができるのである。“おいねずみ”型石冠とでも、呼んでおけばよいだろう。

“おいねずみ”型石冠は、石冠の密集地帯の中のさらに限られた地域で作られているものである。時代は後期後半が推測されるので、上梨の一資料は御物石器が示していたと同様、後期後半期の平村の地は飛驒方面との繋がりが強かったことを物語っているのである。



おいねずみ（上梨）



石冠（東中江）



## (二) 上古の郷土

### 1 原始時代

#### 居住の始まり

五箇山に人間が始めて住むようになったのはいつごろかということを、文書史料によって確かめることは、現在の時点ではむずかしい。村内各地の遺跡の状態・出土品によって、縄文時代の中期と推定されている。詳しくは、前述の「平村の縄文遺跡」に記されたとおりである。

いまから約四く五千年前、縄文中期のころ、砺波平野部の山麓地帯に居住していた先人たちが、鳥獸など獲物を求めて、庄川沿いの「かもしか道」を求めて五箇山中に入り、ところどころの河岸段丘の平らな土地に住みついたのであろうか。あるいは飛驒山中から庄川の流れに沿って下ってきたかとも考えられる。しかし、五箇山において出土する石器などに飛驒系のもものが割に少いようである。そのころの生活は、至って原始的なものであり、木の葉や樹皮を綴った衣類を着け、鳥獸・魚貝あるいは草木の芽・茎・葉・果実を摘んで食べ、洞穴か、笹・木の葉・樹皮で葺いた天地根元造りの小屋に住んでいたことと思われる。その後、ささやかな住居と小集落ができて、弥生時代の中ごろから原始的な農耕が始まり、畑作へと進んでいったと思われるが、その遺物はまだ発見されていない。

#### ナウマン象の 歯化石発見

しかるに、平村の原始時代を考えると、珍らしい一事がある。今から約一三〇年前、嘉永六年（一八五三）に、本村の祖山からナウマン象の歯（右側下顎の第三後臼歯）が発見されたのである。その経緯<sup>いきまつ</sup>は不明であるが、この歯化石については東京都上野公園にある、国立科学博物館の所藏品

台帳に、次のように書きとめられている。

「三十九年（明治）六月、松屋吉蔵より購入、嘉永六年七月、越中砺波郡五ヶ山祖山村山中に於て発掘」

しかし、当初祖山村において、誰が・どこで・どのようにして発掘したのか、現在の村民には全く知るよしもないといわれる。あるいは、庄川の上流から流れてきたのかとも考えられる。それは早稲田大学教授であった、直良信夫博士が「歯根の破損部がいくらか水で磨滅している点からみると、堆積当時、川の水で流れたようなけはいが若干うかがわれる。」と述べているからである（『越前文化』第三・四合集号）。かかる謎をふくんではいるが、とにかく五箇山の原始を語る参考になる。なお、この歯化石については、前章の「地質」のところでも考察を述べてある。

## 村内の考古遺跡

つぎに、五箇山には縄文時代の埋蔵文化遺跡が約四九カ所ある（『富山県遺跡地図』四七、富山県教委刊）。その中二〇カ所が平村地域にあって、特に重要な遺跡「東中江」「下梨こもむら」については調査報告書がある。平村における遺跡の特色や時代区分など、また原住民の生活については、前記の「平村の縄文遺跡」のところで述べた。

このほか、上梨・下梨・小谷・皆葎などにおいて、祝部・土師の土器片、あるいは陶棺らしい破片が発見されているのは、古墳時代の地方豪族の存在を示すものであろう（『高桑敬親著』『五箇山誌』）。

## 2 古代

### 神話時代

その後、北陸にも神話時代があった。当時、小国家分立状態にて新川郡船倉山の神姉倉比売が越中国を治めていたが、能登の補益山の神伊須流伎比古と闘争して国内が乱れた。それを大日貴命（大国主命）が平定したといわれる（『昔聞泉達』録「卷之一」）。かくて四世紀前後まで、北陸地方は出雲民族の支配下に





修験道伝説の人形山 標高1726m

あったが、五世紀に入り、当国は統一国家に組み入れられて、大和朝廷の統治下に伊弉諾国造が置かれた。

さらにその後、飛鳥時代を経て奈良時代に入り、砺波郡・射水郡などの開拓が進んだ。中央政府から、本県へ国司すなわち越中守を任命して派遣されたが、五箇山の名はまだ、歴史上に現われない。

### 五箇山の山々

奈良時代ごろから、役小角が修験道を創め、山岳を修行の場として難行苦行をした。北陸地方の立山・白山・医王山・石動山などは山伏によって開山された。

登拝の伝説があるから、当時、山里への路がかなり開けてきていたと思われる。金剛堂山については、次の口承がある。

「人皇四十二代文武天皇（六八三〜七〇七）の御宇、役小角、伊豆国へ流されしが、勅免の後、当国へ来り、此山に堂塔を建立せられてより、修験道の行場にして（中略）此山の破壊せしは建久年中（一一九〇〜九八）のよし」（宮永正草『越の下』）

天頂石については、松尾村立石として知られていた。

「（前略）往昔、金剛堂山の役の行者生まれし時、此石の上にて座行有しに（後略）」（前掲書）。

次に人形山については元正天皇の養老年間（七一七〜二三）に加賀の白山を開いた、越の大徳泰澄大師が開いたといわれ、天保十四年（一八三三）に書かれた上梨白山宮の縁起によれば（上平村生田家所蔵の写本による）。

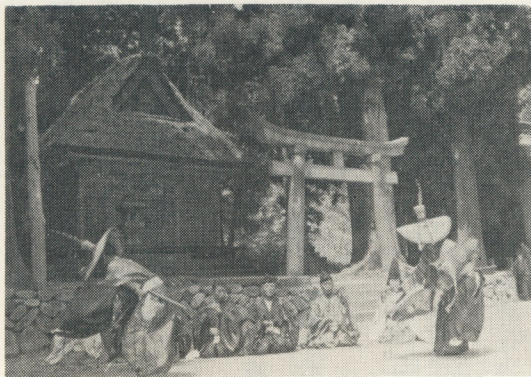
抑当社白山妙理大権現ハ人皇四十四代元正天皇ノ御宇泰澄大師医王山開闢シ

玉ッテ以来辰巳ニ当テケン山有リ彼ノ山ニ夜ナ紫雲タナヒキケリ大師コレヲアヤシミ玉ヘ彼ノ山ニ登リ一七日籠リ玉ニ満ツル曉二十一面觀世音光ヲ放テ現レ玉ヘ大師ニ告テ曰ク我ハ白山之本地ナリ仏法ヲ擁護セント欲シ此山ニ来リ汝ヲ待ナリト曰フ大師欣喜ノアマリ此山ニ堂塔ヲ建立自ラ黄金ヲ以テ彼ノ尊像ヲ作り安置シ玉ヘリ今ノ人形山是也然共兵火ノタメニ堂塔焼失シ其後小堂ヲ建テ尊像ヲ安置シ奉リ年月経テ天治二乙三月廿六日ノ夜当村市良右衛門之夢想ニ告テ曰ク我ハ人形山白山権現ナリ汝我ヲ此村ニ遷シ氏神ト崇敬セバ一村繁栄ヲ守護スヘント告玉フニヨリ彼ノ尊(像)ヲ守リ奉リ当社ニ遷シ奉ル也ト云云。同御厨子ニ奉安置諏訪八幡宮ノ御本地阿弥陀如来ノ尊像ハ行基菩薩ノ御作也。謂レ有テ市良右衛門先祖ヨリ伝来ナリシガ夢想ノ告ニヨリ当社ニ遷奉リ二尊同事之氏神ト奉敬依テ毎歳三月廿六日ヲ祭礼ト定メ如此謂也。一度ヒ拝スル輩ハ現世ニテハ息災延命子孫長久ニシテ後世ハ安楽浄土ニ引導シ玉フ疑ナシ慎テ拝礼ヲトゲラレマスヨウ。

天保十四癸卯三月廿六日ヨリ廿九日迄開張上梨邑ニ於テ

人形山に宮屋敷というところがある。天治二年(一一二五)に前記白山宮が上梨へ移るまで宮のあった場所とされ、草も木も生えていなく、いかにも宮跡らしく見受けられる。文亀二年(一五〇二)再興建立の棟札(『平村史下巻六』(五二頁銘文参照))の現存する上梨白山宮社殿は、国指定の重文建造物になっている。

なお、人形山信仰は、五箇山の平・上平両村民の古い自然信仰でもあ



上梨白山宮〔昭和30年代〕



白山宮の阿弥陀如来



る。農耕用水・飲料水の水源を守護する神体山として朝夕、遙拝した霊山であり、祖先の心のふるさとをやどとして  
いる。さらにこの信仰は宗教的には白山信仰につながる。登頂して南方前面にそびえる加賀の白山の神柄（か）のおごそ  
かな姿を望むとき、修験行者山伏が登拝して受けた靈感に触れる思いがする。

### 古代飛驒との交流

また、平・上平両村に古来、飛驒匠（ひだのたくみ）が建てたといわれる堂宇がいくつもあったといわれ  
る。これは、飛越の古い文化と人間の交流を物語るものである。その工匠の祖地は五箇山に  
近い飛驒国吉城郡天生（あも）で、律令時代に京都に上り、宮廷の造営に当たった木工人として平安時代にひろくその名声  
を挙げた。古代の五箇山に関わる一資料と考えたい。

### 平家落人伝説

五箇山の古代史を書くとき、平家落人伝説は特記さるべき項目である。史実として明確に  
することはできないが、この伝承にはいろいろと考えさせられることがある。

伝承の根源は不明であるが、五箇山の人々は、屋島・壇ノ浦の戦いに敗れた平家が逃げてきたように言い伝えて  
いる。しかし、寿永二年（一一八三）五月十一日の昼から夜へかけて、越中と加賀との国境、砺波山（くりから  
山）において起った源義仲と平維盛との両軍の戦い、すなわち源平大合戦に大敗した平家の落人が、五箇山に遁入  
し、土着して五箇山村を作ったとも考えられる。文献としては、金沢の俳人、鳥翠（ちようすい）台北（たいはい）の著書『北国奇談巡杖記』  
（文化ごろ刊行）には、次のように伝えている（『平村史下巻』一）。

「平家の類葉落居して村民となり、今に子孫あまたある事にて官名を名乗る。（後略）」

また、五箇山民謡として名高い「麦屋節」の歌詞も同書にみられ、平家伝説がうかがわれる。

。波のやしまを遁れ来て薪樵（きこ）てふ深山（み）辺に

。鳥帽子（えぼし）狩ぎぬ脱すてて今は越路の袖がたな

しかし、歌詞の中に「波のやしま（屋島）を通れ来て」の表現があるのは、砺波山合戦に敗れた落人を語るときには矛盾する。このことは、私見ながら四国の屋島や壇ノ浦の戦（一一八五）に敗れた一族が、平家滅亡後、寿永二年（一一八三）に五箇山に遁入した落人たちを同族として頼ってきて、住みついたことも考えられる。

また、麦屋節の名は、平家の落人の紋弥なる者が唄い初めたので、その名を採り、訛ったとも、語り伝えている。

さらに、平家落人に関して、現地の五箇山にはつぎのようにいろいろと口承されている。

# 五箇山における口承

(1) 城村の奇談　むかし（寿永のころか）城小太郎という武士（平家一族という）が戦場から

のがれてきて、小谷の里の山奥に隠れ住んだ。一軒家で代々次右衛門と名のついていた。江戸時代の宝永のころ（一七〇四〜一〇）、畠の胡瓜を食べにきた川太郎（河童）に毒を食べさせて殺したところ、死骸から数万の悪縄（く

さがめ・へくさんぼ）が発生したという伝説がある（『宮永正通編』「越の下草」）。

(2) 落人をかくまった市助　寿永のむかし、下梨村の市助が山からの帰り道で、疲れきった四、五人の落人らしい武士に出合った。ずっと後方から「平家の敗け武士どもを探せ」と、大声でわめきながら松明をかざして追ってくる武士の一隊が見えた。市助は落人を洞穴へ隠して助けた。

平家の落人は市助から畑作りを教えられ、ほうほうを開拓して村をつくったといわれる（『高志の白鷹』）。

(3) 大牧温泉の発見　五箇山に逃げこんだ平家の落武者の中に、藤原賀房という武士がいて大牧に遁入していた。砺波山合戦で傷めた身体が治癒しないので苦しんでいた。

ある日、山鳩が水浴びをする河原の水溜りの湯気に気付き、温泉を見付けて入浴するうち、いつか傷めた身体は全快した。これが大牧温泉の始まりだという（『民話』）。

(4) 麦屋節の由来　郷土民謡の麦屋節は、保存会の発行するパンフレットにつきのようによ来を述べている。



「七百余年のその昔 京師に栄華全盛を極めていた平家は、木曾武者のため、計らずもその勢を失い、続いて、頼朝兄弟の爲、長門の壇の浦に儂<sup>はかな</sup>き最後を遂げたのであります。かくて平家の一門は末路の悲哀に胸を掻き乱しつゝ、遠く人里離れた庄川の上流五ヶの山中に逃れ、弓矢持つ手に鎌鎌を取り、麦を蒔き、菜種を植え、麻を作り、人目を避けて安住の地と定めました。その末裔こそはわが平村の起源で、このこと今に老小口耳となつて、伝わっているのであります。

さきに平家にあらざれば、人に非ずと権勢を恣にしたが、今や權花一朝の夢と化し、ひたすら住時を回顧しては、今昔の境遇に対して人知れず悲哀の感を抱いていたのであります。

この絶望的な生活の中から、在りし日の欲楽を追つて唄い出されたのが、妻屋節の唄と踊の濫觴であります。

## (5)その他の伝承

平村の村名は、「平家の子孫が住みついたので付けられた」と、村民は語りついでいる。

小坂谷福治著『落人の伝承』(昭四五)の中には、平家落人の伝承が数話採取されている。

。利賀村大牧の熊野権現社は、平家にゆかりある宮という。

。合掌造りの間取りの寢室を「チョーダ」という。書院造りの上段の間の「帳台」の構造に似ているのでこの名がついたといひ、平家の子孫が過ぎし日の都風<sup>ぶふう</sup>をなつかしんで伝えたのであらうか。

## 歴 史 性

史料に無いとして、砺波山合戦に敗れた平軍の落武者の遁入説を否定する歴史学者もある。ところが、西砺波郡福光町臼中地区に残る伝説「臼中村の古器」(前出『北国奇談巡杖記』『越の下草』)には、史実ではなくても美しいロマンがある。

それには、「昔平家の後胤このところに寓居せり、ここに古より名主たるもの長持一棹あづかる。何のおさめあるとも村中に知るものなし云々」。また、「寿永・元暦のいにしへ、門脇中納言教盛卿<sup>のりもり</sup>当国の国司にておわしければ、其よしみ有て従者、教盛卿の北方・公達を伴ひ戦場をのがれ出て当国へ逃げ下り、此山奥に茅屋をしつらひ心

やすく住侍りける子孫なりといへり云々」とあって、厳重に封された箱が伝わっていた。

故あって蓋をあけたところ、琴・笛・太刀・楽の譜など（十二品）があらわれた。なお、この村には厳島明神を勧請して氏神とする。と書かれている。

臼中村の東に鳥越峠があり、小瀬峠があつて五箇山へ通じる。砺波山合戦の平家の落武者が、どちらの側からかこの峠を越えて遁入したとも考えられる。

## 伝説の背景

前に記したように、五箇山に住みついた平氏の後裔は、すべてが砺波山合戦の落武者のみといひ切れない点もある。民謡の筑子節と麦屋節の歌詞に「波のやしまを逃れ来て」の句があるのは、いささか、屋島の合戦の落武者派の歎きを表現したのかとも思われる。

また、史実的に見ると、平家の全盛期から砺波山合戦前までは、北陸道諸地域、ならびに東海・東山両地域は平氏とその縁類による知行国支配を受けていた。砺波山合戦敗北後の落ち行く先を、おのずから、所領故地の縁に求めたことも考えられる。越中国司だった平家一族には、平盛俊・平業家・平教盛などの名が挙げられる。また、飛驒の国司にも平家一門の人々が任命されていた記録がある。平家滅亡後、飛驒を頼って落ちて来り、さらに奥地へと五箇山の地に移ってきた者もいたのであろう。筑子節・麦屋節の歌詞にうたわれたように、屋島の合戦の落人もいたことを認めた。

以上、五箇山の平家伝説については、内実的にこの山里に住む人々の心にいろいろと結ばれているものがある。このことは、民俗学上、「貴種流離譚」として、全国的にいろいろな類例が多いが、その中で、五箇山は平家谷を代表する「落人のかくれ里」として、有名である。